



「職員室」は、どう変わるべきだろう？

「教育」は、どんな形を変える。

学習指導要領のアップデート、入試改革。
それらに伴う学校改革、新たな教材・設備の活用。
そして保護者・生徒たちのニーズの変化……。
大きな変化が続く教育業界。
その最前線には、いつだって教師が立っています。
今回は「職員室の声」をお伝えする
特別企画をお届け。
ゲストには、SNSを中心に
全国各地の教員たちの声と向き合う、
ゆきこ先生をお招きしました。

PROFILE

ゆきこ先生

公立小学校教員として働くなかで適応障害に。その経験から、SNSで「しんどい先生たち」へ、心が楽になる働き方やメッセージを発信するようになり、現在フォロワーは6.5万人ほど。2022年にはその経験をアドバイスのかたちまとめた著書「学校がしんどい先生たちへ」をKADOKAWAから出版。現在は非常勤講師として働きながらも、私学のSNS運用コンサルなども担当。

同じきもちで、
同じほうを向くのは、むずかしい。

環境の変化にはストレスがつきもの。新生活のリズムについていけず、体調を崩す人も。そういう視点で言えば、コロナと学校の関係はとんでもないものだった。なにせ「学校に行きなさい」が、「学校に行ってはいけません」になるのだから。それは生徒や保護者だけでなく、教師にとっても同じことだった。
ゆきこ先生：「教師の仕事が忙しい」ということは、もう共通認識みたいになっています。そこに、急にオンライン授業がやってきて、タブレットが生徒の数だけ必要になって、それはもう大変でした。**でも本当に大変だったのは、その変化を全員が同じように受け止められなかったことだと思います。**
そもそも、教師という職には多少なり属人性が含まれる。授業の進め方も、

生徒との向き合い方も。生徒と教師といっても、つまるところ人と人。マニュアル通りに進まないことの方が多く、それぞれがキャリアを重ねるなかで、経験則を見出してきた。
ゆきこ先生：これはひとつの例ですが、教員間のICTリテラシーの差は、多くの学校が課題にしています。GIGAスクール構想が前倒しでぎゅっと進められて、これまで黒板と紙で自分なりの正解を見つけてきた先生の中には、拒絶反応を起こす方もいました。逆に、そういった先生方の理解を得られず、しんどい思いをした先生もいます。「これまでの教育」を大切にしたい気持ちと、前向きに変化に対応してこうという気持ちがぶつかってしまうシーンも、少なくはありませんでした。



「生徒のため」が、
みんなを固くする。

生徒たちの顔からマスクが取り払われ、あたりまえに登校する日々が戻ってきた。そんな今でも、職員室は常に変化を求められる。
ゆきこ先生：コロナ以前のスタイルに戻るなら戻そう、という人もいます。逆に、コロナから学んだことを生かして、効率的な教育を目指そうとする人もいます。私のもとに届くメッセージを見る限り、程度の差はあっても、職員室内に衝突はあるようです。
ただ、ゆきこ先生は言葉をつなげた。
ゆきこ先生：衝突することが悪いこととは思わないうんです。お互いの話を聞いて、対話する。その始点になればいいのだと思います。でも、教師という職はすべての業務に「生徒のため」という枕詞があるから、上手に対話することが難しいこともあるんです。
教師の働き方については、いたるところで議論が起きており、もって効率的な働き方があるのでは、という声も上がっている。しかし実際に生徒に向き合うなかで、「効率を度外視した働き方が必要」という価値観も存在する。そしてそれを、「仕方がない」と受け入れる雰囲気も存在する。
ゆきこ先生：ひとつ、私が素敵だと思っただ声のかけ方を紹介します。オンラインでの課題提出を敬遠されていた先生に対して、「宿題用のノートって重いですよ。結局見るのは1ページなんだから、写真撮って送ってもらった方が先生もラクできますよ」というものです。問題の論点を「生徒のため」ではなく、「自分たちのため」に置き換えて接すると、耳を傾けてもらいやすくなります。
教師が属人的な仕事になる理由のひとつは、その熱意が起因しているそう。多かれ少なかれ、理想やこだわりを持って「生徒のため」に教壇に上がる。教師を続ける理由は人それぞれでも、どこかに熱意がある。それがときに、衝突の原因にも成り得る。
ゆきこ先生：だから「生徒のため」と言ってしまうと意見の食い違いも起きやすいのですが、それで苦しんだり、衝突してしまったりするのは、健康的ではないですよ。自分たちのために、と主語を変えてみると気持ちもラクになるし、それが巡り巡って生徒のためにもなるはずですから。

ちょっとした相談ができる場所があるといい。

Instagram上で、ゆきこ先生のアカウントには多くの声が集まってくる。それらは「文章にならない言葉」、「声にならない叫び」のように感じ取れるそうだ。
ゆきこ先生：職員室内はいつも慌ただしくて、どれだけ大変でも「ほかの先生はがんばっているから」とか、それこそ「生徒のためなんだからやらなくちゃ」とか、自分でバイアスをかけてしまう人が多くて。そのうち、自分の中の「正しさ」を前に折れてしまう人も少なくないんです。そんな先生たちが、気持ちをラクにするために私のアカウントを訪れてくれたなら、すごくうれしいです。自分自身が、学校に通えなくなった過去を持つからこそ、集まる

声に、一つひとつ共感を返す。大それたアドバイスを送るのはなく、ちょっとした相談相手になる。
ゆきこ先生：きっとそれぞれ理想があるから、正解はないんです。でも、「そうだよ」ということはできる。今は私のアカウントに対して気持ちを吐き出してくれているけれど、**こういうコミュニケーションが職員室内でできるようになること**が、一番いいなって思います。教師には、一人ひとり描くビジョンがある。それがうまく溶け合うようなコミュニケーションが、職員室内にも生まれるといい。ICT教材や学校改革、そのキーワードのなかに、職員室を思いやる気持ちが含まれていると、幸せだと思う。

ゆきこ先生執筆、先生たちへの「処方箋」!



学校がしんどい先生たちへ
それでも教員をあきらめたくない私の心を守る働き方
KADOKAWA 出版
子どもたちと一緒に笑うため、自分が好きな自分で働くために。先生としての在り方、関わり方、働き方を綴った一冊です。気軽に読める文体から、ゆきこ先生の人柄が伝わってきます。